

| | |
|------|---|
| 開催地名 | 京都府京田辺市 |
| 開催日時 | 令和8年1月20日(火) 13:30 ~ 15:30 |
| 開催場所 | 京田辺市立中央公民館 |
| 語り部 | 草 貴子(宮城県仙台市) |
| 参加者 | 自治会 自主防災組織 防災士 市職員 81名 |
| 開催経緯 | 本市の京田辺市では、自然災害への重要性を非常に感じており、地域と連携しながら、自分自身や家族の命を守る、地域を守るために様々な災害リスクに対応出来るよう取り組んでいます。改めて大規模災害時の避難所の状況などについて認識を深めてもらうべく講演会を開催した。 |
| 内容 | <p>(1) はじめに</p> <p>消防庁のお仕事に携わらせていただき14年の月日が経ちましたが、この間の熊本や能登地震をはじめ、今でも日本各地で台風や豪雨による水害、山火事などが起こり、我々の生活に大きな被害をもたらしている。発災直後は被害情報や避難所での様子がメディアで大きく取り上げられることもあり、防災や減災をテーマにしたテレビ番組や書籍が増えることから、災害に関する意識が高まったかのように感じるが、半年も経てば、せっかく培った防災意識は薄れ、用意した防災グッズの使用期間は切れ、どこでどんな被害があったのかなど、忘れ去られ風化してしまうのである。</p> <p>被害に見舞われた方々のことを思えばインフラ整備、心のケア、産業復興や災害対策の強化など、多岐にわたる息の長い支援が大切であり、被害者に寄り添い、ニーズに応えた活動を行い、後世に伝えることが大切だと強く感じる。みんなが持ち合わせる知識や知恵を生かし、被害を最小限にさせていただくことができれば防災・減災への一歩になるのではと考える。</p> <p>(2) 東日本大震災の体験と教訓</p> <p>3月11日、2時46分、突然立ってられないほどの激しい揺れに見舞われた。私は市名坂東町内会の会長を務めており、集会所を避難所として開放し、約100名の避難希望者を受け入れた。避難者の中からリーダーを決め、我々、町内会役員はサポートする形で運営を始めた。ほぼ初対面の者同士で限られた空間で寝食を共にすることは決して楽なものではないので、役員主体で交流する機会を提供し統率を図れるようサポートに徹したのである。</p> <p>9日間避難所として開放しましたが、人間の色々な一面を見る事ができた。消防分団の方が停電中、真っ暗な中で見守っていただいたり、みんなで協力し合いながら温かい言葉を掛け合ったりと、思いがけず人のつながりや優しさに触れることができた半面、非常時はいつもと違い精神環境が不安定になることは理解できるが、周りへ怒</p> |

りをぶついたり、自分自身の権利主張を押し通そうとする身勝手な行動も目に余り、モラルの低下やゴミの不法投棄といった人間の弱さも露呈したのも事実である。震災を通して非常時には、人の気持ちを思いやり、モラルを持つことが大切なことだと痛感したのである。

(3) 「女性視点」を活かした町内会・避難所運営

震災から2年後の平成25年には、確かな災害への対応力をつけることが必要であると考え、自主防災組織として市名坂小学校区避難所運営委員会を発足した。

行政からの支援のみでは不足する物資も多いので、5つの町内会に毎年負担金をいただき、物資を購入して支援に充てている。

組織体制は総務班、情報広報班、食料食糧物資班、救護班、衛生班、そして女性コーディネーターの6つの班構成で成り立っており、特徴としては「女性コーディネーター」を設けたことである。具体的な活動内容としては、皆さんの困りごとを解決できるようお手伝いをする、よろず相談所のような役割を担っている。主婦がメインの部門になることもあり、みんなで知恵を出し合い、日常会話からアイデアを引き出せるような体制を取っており、今では若年層の若々しい視点からの意見も新たに取り入れて活動している。男性、女性の得意分野を活かすことでしょう。

(4) 実践的な避難所運営について

市名坂小学校区避難所運営委員会では、住民参加型の大規模訓練とは異なり、各班が知見を広め、実践を通して力をつけるリーダーのための研修会をコンセプトに、避難所においてスムーズで的確な運営ができるよう、毎年趣向を凝らした訓練を行っているのが特徴である。誰でも慌てないで避難所を開設できるように「初期対応手順書」を作成して避難所に設置し、仮設トイレの設置訓練を実施、その体験を通じて様々な課題を感じてもらう。組み立ての段階で40分もの時間を要し、高所での組み立て作業も発生するので誰でも設置できるものではないのである。他にも日常的なトイレの扉は外向きでの立て付けなのだが、避難所の仮設トイレは内向きになっており、入ることも難しく扉を閉めて利用することも困難である。また、便座の位置が高く、足が届かないことから踏ん張れないなど、実際に自分で座って体験して、目で見て感じてもらい現場でしか分からない課題を共有している。

災害時には、生活環境も大きく変わり、誰もが多くの心配事を抱えるので精神的にも肉体的にも大きな負担を強いられることになる。その結果、他者への配慮が薄れ、心ない言動につながることも考え得るのである。避難所を運営するうえで、特別に配慮を必要とする人、いわゆる災害時弱者の方々の状況も鑑みる必要がある。過去には聴覚者障害協会の方を招き、双方が運営する側・される側の視点に立って意見を交わ

しながら訓練を実施した。聴覚障害者の方には、受付の時点で別に設けたヘルプコーナーへのご案内し、筆談にはタブレットを活用するなど、お互いが人権を尊重しながら適切な支援を行うための工夫を試行錯誤しているのである。

(5) 訓練を経て自主防災の進化

避難所の中では、誰が運営委員か判明させるためにビブスを着用してもらうことで、一目で判別できるように情報統制を図っている。また、行政ができる支援には限りがあるため地域や企業を巻き込み、多くの知恵や学びを取り入れている。と同時に、運営委員をはじめ、町内会役員といったサポート側の心の持ち方や活動範囲の見直しも必要であった。役所や役員など、決められた人間だけで重荷を背負う必要はなく、また乗り切れるものではないということを全員が理解しなければならない。災害は被災者全員で乗り切るものであり、各々の当事者意識が大切なのである。

総じて地域防災においては、自分たちの特性を十分に理解して、自分たちにできることを無理のない範囲で、オリジナリティのある身の丈にあった防災を実践していくことが重要である。

まだまだ現在も、運営の難しさを痛感しながら活動をしているが、一人一人が他人事ではなく自分事として向き合うことで、それが最終的に組織の大切さを問うことにも直結するのではと考える。

(6) 伝えたいこと

東日本大震災から14年の時を経て、一人一人が自分の身を守る術を得て、公的支援も、災害時における法律的な物質的な環境整備も整い、「自助」「共助」への考え方も進化している。

私自身、震災を通して人間の無力さ、命の尊さと儚さ、悲しみの受け止め方、人の優しさを感じることができ、生かされている私たちは一時、一瞬を大事にして生きなければならないと痛感させられた。いかなる時に被災しても、悲観せず自分や仲間を信じて自分の役目をきちんと果たすことが大事であると考えている。

| | |
|-------|---|
| |  |
| 開催地より | <p>震災当時の様子や、実体験を踏まえた貴重なお話を聞くことができた。 大きな災害を経験していないが、自分事としてとらえ、自助・共助の重要性や地域の防災力を高めていきたい。</p> |